

長山直治氏追悼集刊行委員会編『加賀藩研究を切り拓く —— 長山直治氏追悼論集』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小酒井, 達也, KOZAKAI, Tatsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057368

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新刊紹介

長山直治氏追悼集刊行委員会編

『加賀藩研究を切り拓く』

—長山直治氏追悼論集—

小酒井 達 也

本書は、二〇一四年七月九日に逝去された長山直治氏の追悼論集である。氏の業績を偲ぶ有志を中心に編集され、氏の三回忌にあたる二〇一六年七月九日に刊行されたものである。長山直治氏は、高校教員を勤める傍ら、加賀藩に関する研究を積み重ね、数多くの史料・著書・論文を執筆してきた。氏の業績については本書の冒頭や、巻末の著作目録で紹介されているので、詳しくはそちらを参照していただきたいが、当初は製塩等の産業史を中心に、後に加賀藩後期藩政史を中心に研究を進められた。この他にも、海運や能楽など多方面で研究成果を残してきた。本書は「論文」、「寄稿」、「追想」の三部構成をとっており、それぞれの角度から長山氏の足跡や加賀藩の研究状況について知

ることができるようになっていいる。構成は以下のとおりである。

刊行にあたって

I 論文

文政二年十村断獄について

奥村栄実の加賀藩政復帰の背景について

II 寄稿

能登系天野文書の入手事情 菊池紳一

真言密教金剛王院流と馬場長久寺 室山孝

加越能文庫による大坂冬の陣の検討 岡嶋大峰

前田光高の学識を探る 木越隆三

慶安事件と加賀藩 見瀬和雄

人持組頭の成立過程に関する一考察 林亮太

宝永末年における金沢の両替事情 中野節子

大野木克寛の旅 高木喜美子

村井村与三右エ門襲撃に関する一考察 石野友康

加賀藩士と有沢兵学 近藤真史

『太梁公日記』から見た加賀藩能楽事情 西村聡

勝興寺文書にみる前田土佐守家の和歌修養 竹松幸香

極貧村御仕立仕法について 袖吉正樹

十村の文人的趣味 高堀伊津子

安政五年コレラの対処法に関する史料について 鷺沢淑子

加賀藩における庭の利用と保養・領民 池田仁子

日本海海運業者と情報活動 堀井美里

松雲公への景仰と森田柿園 橋本治

「兼六園」の呼称をめぐる若干の考察 本康宏史

幕末維新时期藩政史研究の課題と展望 宮下和幸

「まだら・三夜」、蛸島「早船羽歌」、「福浦御船歌」と加賀

藩船手足軽 西山郷史

野々市市が単独市制に至る過程 徳田寿秋

III 追想

「孫」に大甘だった長山先生 竹松幸香

先生を偲ぶく奥様への手紙からく 寺島恭子

長山先生を偲んで 橋本治

金沢で、福井で、長山直治先生に学ぶ 堀井雅弘

想い出辿り着くところ 横山方子

IV 長山直治 略歴・著作目録

I 「論文」では、氏が一九九〇年代に著した二本の論文が再掲載されている。この二本は、数多くある氏の論文の中から現在では入手することが難しく、かつ氏が晩年力を注いだ後期藩政史を知る前提として必要不可欠なものとして刊行委員が精選したものである。

「文政二年十村断獄について」は、文政二年の十村断獄について、事件そのものの検討と、十村断獄を含めた断獄の推進勢力による一連の改革の目的について分析を進めたものである。同論文では、まず十村断獄の経過と事件により処罰あるいは登用された十村の構成について説明している。次に、断獄の推進勢力について分析を加え、中心に関九郎兵衛と新田裁許グループがあり、それに同調する藩士の存在があったと述べている。これらの人々が藩主斉広親裁による「御国民成立」を標榜する改革の担い手であったことを指摘し、断獄を同改革の一環の中に位置付けている。また、推進派の改革目的についても検討を加えており、風俗の肅正と隠田等の摘発に加えて、小前・頭振層への高分配による救済を意図していたと述べられている。しかし、仕法の実効性の乏しさと新任の十村・新田裁許による現場の混乱により、改革が頓挫し、翌年には政策の転換が図ら

れたとした。

「奥村栄実の加賀藩政復帰の背景について」は、上記の斉広親裁のなかで文政元年に職務を解かれた奥村栄実が、天保期に至って藩政に復帰してくる過程について、当該期の政治情勢をもとに考察したものである。本論では、栄実の初期の経歴から職務の停止に至るまでの流れを述べた後、藩政参画について言及しているが、従来『石川県史』で言われてきた斉広の没後すぐではなく、斉泰帰国後の天保七年まで遅れるものとしている。また、藩政復帰の背景として、寺島蔵人一派が発言を強めるなかで、藩主斉泰が若年の年寄衆に不満を抱いていたことを挙げている。また、寺島蔵人一派の構成員にも分析を加え、年寄と一派の対立を年寄と非年寄層の対立であったと位置付けた。こうした状況下、年寄体制強化のため、斉泰と年寄により栄実の藩政復帰がなされたとした。

両論文を併せて読むことで、近世後期加賀藩政史が掴めるようになってきている。前者については、十村断獄について従来の水準より詳細な事実を明らかにし、事件を藩政の動きのなかに位置付けた点で貴重な成果である。後者についても、後の藩政担当者の政務復帰過程を通して当該期政治史をより厚みのあるものにした点で重要である。

収録論文の特色として、二本とも藩主及びその側近と年寄、年寄と非年寄層の対立が描かれており、当該期の加賀藩政において、停滞期に方針の相違による対立が少なからず存在していたことが読み取れる。氏の著作『寺島蔵人と加賀藩政』や同時期を取り扱った論文を読むことで、その詳細はより一層知ることができるとは、本書収録の論文を読むだけでも、長山氏が、『石川県史』以来、手薄であった当該期の加賀藩政史を大きく進展させてきたことがわかるのではないかと思う。

Ⅱ 「寄稿」には、本論集刊行の賛同者から寄せられた計二二本の研究論文が収録されている。本数が膨大であるため全ての中身を紹介するのは紙幅の都合上困難であるが、まず論題を眺めてみて、氏の研究領域であった加賀藩はもとより、近世以外の時代や歴史学以外の分野の論文が収録されていることがわかるが、これは本書の冒頭で述べられているとおり、氏の交流の広さを示すものであろう。

また、近世加賀藩に関する研究についても、多岐にわたる分野の論文が収録されている。その内容には、『太梁公日記』や『大野木克寛日記』等、氏が翻刻・監修した史料を用いたもの、氏の研究成果を引用したもの、あるいは氏から直接助言を受けたものが数多くあることがわかる。この

一事をとつても、長山氏が「論文」でとりあげたような後期藩政史に関する以外にも、十村、兼六園に関するのと、能楽等、幅広い分野の研究を手掛けてきたことがわかるのではないだろうか。また、多くの後進の研究者が、氏の手掛けられたさまざまな研究を参照し、影響を受けていることから、氏がさまざまな分野で先鞭をつけ、それが後の研究で依拠すべきものとして重視されていることも窺える。

Ⅲ 「追想」は、在りし日の氏の人柄を偲はせる逸話が綴られている。ここでは、氏の研究姿勢について、何点か窺い知ることができる。

一点目は氏の史料に対する向き合い方である。氏は『加賀藩史料』等の安易な引用を避け、原史料の読解をもとに研究を進めていくことを重視していたが、氏の史料についての該博な知識や古文書読解能力は、近世史料館でひたすらに史料を読み進めてきた積み重ねの結果であることが逸話から窺われるのである。二点目は、氏の教育者としての立場である。氏は研究と並行して定年まで高校で教壇に立ち続けた。その授業を受けたもので、その後研究者となつたものもいる。本書からは、氏が後進研究者を熱心に指導してきた様子が窺える。

また、氏は加賀藩や古文書の講座を通して、史料読解によつて培われた知見を一般向けに発信していたことも読み取れる。『寺島藏人と加賀藩政』や『兼六園を読み解く』など氏の著作は、史料・文章ともに読みやすく書かれていることからその点は垣間見ることができ、蓄積した知識を一般に普及しようとしてきた氏の様子がわかる。

このように、長山氏は史料の読解のみならず、自らの知識を後進にそして一般にと発信することを重視していたことがわかるのである。この点、本文中で述べられているとおり氏はまさに「教育者」であった。実際、全ての寄稿で「長山先生」と呼称されていることから、氏が教育者としていかに慕われていたかがわかるのである。研究者は自己の専門分野について知見を深めていくことはもちろん重要であるが、その成果を社会に発信していくことも重要な役割のひとつである。本書からは、長山氏がそのことを実践していたことを知ることができる。

本書を通読して、改めて氏が加賀藩研究に残した業績の大きさを認識させられる。繰り返しになるが、氏がこれまで幅広い分野で研究を行い、それぞれで膨大な史料を読み解き貴重な成果を残し、研究の道筋を「切り拓いて」きたこと、多くの後進研究者が、氏の研究を参照しつつ研究を

発展させていること、後進研究者が氏の授業から日本史に関心を持ち、また研究についても氏から指導を受けてきたことがわかる。研究成果を蓄積し、後進が研究していく土壌を育んできた氏の姿勢が、『加賀藩研究を切り拓く』という書名に集約されているように思われるのである。

このように、数多くの研究上の財産を後学のために氏は遺してくれた。本書は、長山氏の仕事を継承する加賀藩関係の研究動向を広く知るのに適した書である。同時に、本書は長山氏の研究業績を辿り、学ぶための導入としても恰好のものともなっている。本書は、長山氏の業績はもちろん、氏の研究者としての、史料、研究、教育への向き合い方に触れるという点でも、有益なものではないかと思う。

(二〇一六年一〇月刊、桂書房、四一三頁、三五〇〇円＋税)